

23 粕壁宿～杉戸宿

埼玉県杉戸町
本郷～堤根
(歩行距離 2096m 26分)
歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
JZE00512@nifty.ne.jp



馬頭院

馬頭院

本尊は伝教大師の作と伝えられている。脇仏には延命地藏及び不動明王が三休ある。
中興開山は宥盛和尚で、慶安2年(1649)に入寂した。沿革の詳細は寛政年間の類焼等により不明。
日光街道すぎと七福神のひとつ。
文永7年(1270)銘板石塔婆
馬頭院観音寺にあり緑泥片岩に阿彌陀如来の種子キリク(如意輪観音)と文永7年(1270)の銘がある。紀年銘があるものとしては杉戸町最古のもの。

筋違い
道路のつけかたで、外敵の侵入の際の市街戦を想定して考え出された「五の字型」の道路。道は一応四方に通じているが、見通しを妨げるために食い違いを設けたり、丁字路や鍵曲がりをつくる。場合によっては袋小路もつくり、これらを利用して敵を迎え撃つ。道も広くはない。幹線道路でもせいぜい7～8mどまりとし、大群の襲撃を阻むのである。

江戸三十六見附

見附は読んで字のごとく「見つける」ことで、そこから「見張る」という意味が派生し、不審な者が侵入しないように見張る場所、すなわち監視所を見附と呼ぶようになった。単に「江戸三十六門」ともいう。
江戸城は、15世紀、室町時代に太田道灌が江戸湾付近に建てた平城で、攻められやすい弱点をもっていた。江戸に幕府が開かれたころは、徳川政権の基盤も不安だったので、江戸城は敵襲に備えて大改修され、渦巻き状に堀をめぐるして「難攻不落の城」に変える努力が行われた。「堀に面した城門」には「枡形」と呼ばれる長方形の小さな広場が設けられ、そこを通らないと城内には入れなくして、枡形に入る不審者を監視する仕組みになっていた。この「枡形のある、堀に面した城門」を見附と呼んだ。
隅田川に近い外堀から渦巻き状に 1.浅草橋門 2.折違門橋 3.小石川門 4.牛込見附 5.市谷見附 6.四谷見附 7.食違門 8.赤坂見附 9.虎ノ門 10.幸橋門 11.山下門 12.数寄屋橋門 13.鍛冶橋門 14.呉服橋門 15.常盤橋門 16.神田橋門 17.一ツ橋門 18.雄子橋門 19.竹橋門 20.清水門 21.田安門 22.半蔵門 23.外桜田門 24.日比谷門 25.馬場先門 26.和田倉門 27.大手門 28.平川門 29.桔梗門 30.西の丸大手門 31.西の丸玄関門(二重橋) 32.坂下門 33.内桜田門(桔梗門) 34.下乗門 35.中之御門 36.中雀門を見三十六見附としている。『江戸城三十六見附を歩く』(鈴木賢一著 わらび所望)

旧道らしい古民家



九品寺の道標

堤根の道標

九品寺入口角に庚申塔がある。天明4年(1784)に村人が建てたもので、高さ1mほどで「左日光」「右江戸」、南面に「青面金剛」、台座に(き)号が刻まれている。

隅田川五橋

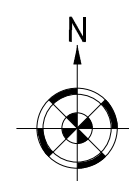
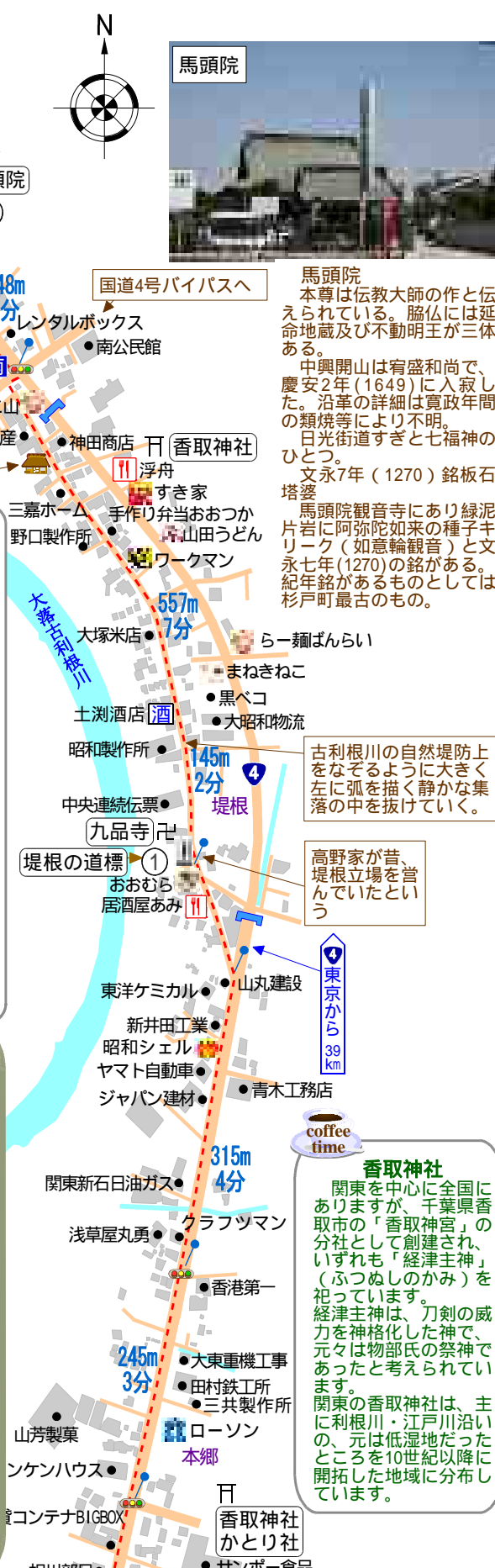
隅田川は、五本の橋と船渡しで川を渡る方法があり、五本の橋を江戸五橋と呼んでいました。
上流、「千住大橋」で、江戸最初の橋で文禄3年(1594)に家康が奥州街道往還の人々のために造らされました。
次が竹町の渡しがあったところに「吾妻橋」をかけ、この橋は、大川橋と呼ばれ江戸時代の最後にかかれた橋で安永3年(1774)町民の願い出により、町民が架け、しばらくは有料でした。
その下流に、「両国橋」があり、江戸で2番目、貞享2年(1658)に架けられ、江戸と下総国(千葉県)を結ぶことから両国橋と名付けられました。この両国で、たくさんの見世物興行や相撲などが、行われ、江戸の文化を庶民とともに育んだところでした。
さらにその下流に、江戸3番目に架けられた「新大橋」があり、大橋の次に架けられたので新大橋とよばれました。
隅田川の一番下流に、深川の大渡しに変わり造られた橋が「永代橋」で、元禄11年(1698)に架けられました。この橋が、江戸最大の橋で、その美しさと形がアーチ状をしていたため、虹橋とよばれ、江戸から深川、富岡八幡宮、門仲仲町に続く橋です。

5 杉戸宿

江戸・日本橋から数えて5番目の宿場である。古くから利根川(現・古利根川)の渡し場があり、日本武尊が東征を行った際にこの付近に上陸し、そこが杉の木が茂る港(水門)であったことから杉門と名付けられたとする伝説がある。
宿ができる以前の奥州街道は、鎌倉街道として、今の杉戸の外れから北西方面、古利根川に面した下高野あたりを通っていた。
宿場自体は五街道の整備に伴い、元和2年(1616)に近郊の郷村を集めて成立した。宿場は街道に沿って町並みを構成し、5と10のつく日には六斎市が開かれ、近郷商圏の中心地となっていた。町中は新町・下町・中町・上宿に分かれ、それぞれに名主や問屋が置かれ、本陣・脇本陣はいずれも中町に置かれていた。
周辺は一面水田で「其近傍古利根川(葛西用水)沿岸の地は良種の糯(もちごめ)を産し、幕府の頃將軍の膳糯(ぜんじゅ)は必ず此地に取ると云ふ」(日本名勝地誌)
天保14年(1843)の改めによると、宿の往還は、長さ16町55間、道幅は5間、宿内家数365・人数1,663、本陣1・脇本陣2、旅籠屋46(大4・中7)であった。
現在の町並みは、都市化の影響をさほど受けていないためか旧家も比較的良好に残り、旧宿場街の面影を感じさせる。

香取神社

関東を中心に全国にありますが、千葉県香取市の「香取神宮」の分社として創建され、いずれも「経津主神」(ぶつぬしのかみ)を祀っています。
経津主神は、刀剣の威力を神格化した神で、元々は物部氏の祭神であったと考えられています。
関東の香取神社は、主に利根川・江戸川沿いの、元は低湿地だったところを10世紀以降に開拓した地域に分布しています。



coffee time

coffee time

coffee time

coffee time